

9 「夢の香」の栄養管理の要点と施肥法による酒造特性の変化

福島県農業試験場会津支場・平成12年度農業試験場試験成績概要

1 部門名 水稻－水稻－採種・繁殖 分類コード 01-01-01121325

2 担当者 大谷裕行・新田靖晃

3 要 旨

(1) a当たり収量60kgを目標とし、稚苗を栽植密度(30×16cm)で移植する場合、無理のない構成要素の目標はm²当たり穂数が380本、1穂粒数71粒、登熟歩合85%、千粒重26g程度であった。構成要素では穂数の変動が大きかった。

(2) 7月4半旬の葉色が34以下になると、穂数が380本以下になり、m²粒数が不足した。このため、幼穂形成始期の追肥により7月中の葉色を34～35に維持することが重要である。また、稈長が85cmを超えても倒伏が認められないことから、肥切れが早い年次には、幼穂形成期前のつなぎ肥施用も可能と考えられた。

(3) 整粒と心白粒の比率、検査等級は、基肥が同じ区で比較すると減数分裂期の追肥により両年次とも低下が認められた。

(4) 平成11年の酒造特性からは、6-2-0区で真精米歩合が高まり、碎米率が低く、粗蛋白が減少する傾向が認められた。また、基肥が同じ区で比較すると、減数分裂期の追肥により、碎米率が増加し、粗蛋白が増加する傾向であった。

(5) 以上より、「夢の香」のa当たり収量60kg、1等米格付けを目標とする栽培では、1) m²穂数380本を安定して確保でき、また、幼穂形成期の追肥ができる基肥 量(幼穂形成期の葉色36以下)を施用すること。2) 生殖成長期にあたる7月の葉色を34～35の範囲に維持すること。3) 減数分裂期以降の追肥は、米質と酒造特性低下の要因となるため施用しないことがポイントとなる。